咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑥ 日本人初の世界一周

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

ニューヨークにて

幕府遣米使節団の旅は続く。

フィラデルフィア付近のサスケハナ河では線路から蒸気機関車をそのまま汽船に乗せて河を渡るので、一行はその発想に度肝を抜かれる。まだアメリカでは蒸気自動車も一般化されていない時代、すでに汽車を乗せて河や海を渡るフェリーがあったのである。

1860年6月17日（万延元年四月二十八日）午後二時、ニューヨーク港に到着した。遣米使節はユニオン・スクエアーに於いて、米軍に敬意を表し、兵士に対する閲兵を行った。閲兵式が終了すると祝砲が発せられ、使節ら一行は花と旗で飾られた数十台の馬車に乗り込み、宿舎となるメトロポリタンホテルまでブロードウェイをパレードした。沿道は祭りのような賑わいで、パレードはなかなか進むことが出来ず、夕方にホテルに到着した時には、使節団の一行は皆疲労困憊していた。

メトロポリタンホテルからブロードウェーをパレードする幕府遣米使節団。日章旗を振って歓迎する大勢のニューヨーカーで沿道は大変な熱気に包まれた。

翌18日、軍楽隊による演奏が奏でられる中、メトロポリタンホテルを出発した使節団のパレードはニューヨーク市庁舎を表敬訪問し、ウッド市長はじめ同席したモーガン知事らと会談した。

毎日のように新聞で報道されている、日本からはるばるやってきた使節を一目見ようと、ブロードウェーには連日数十万人もの人々が集まり、日の丸を振って歓迎した。騎兵隊、砲隊、音楽隊などパレードに動員された軍隊は七千人にものぼり、アメリカ開闢以来の規模であった。メトロポリタンホテルなどの建物の窓という窓には日米の国旗が飾られ、沿道に溢れる人たちで周辺は大変な熱気に包まれた。

詩人ウォルト・ホイットマンはこのときの忘れがたい印象を詩集「草の葉」の中に、『ブロードウェーの華麗な行列』と題した詩に残している。

“西の洋をわたって、ニフォン国より此方へとやってきた、礼儀ただしい、頬の浅黒い、二刀差し（にほんざし）の使節たち。・・・”といった一節ではじまるこの詩で、ホイットマンは世界の民族の自由を謳っている。

ニューヨークに滞在した使節の団員たちは、造営中の庭園（セントラルパーク）を訪れたり、大寺院のような店（おそらく百貨店であろう）に驚いたりしている。

ユニオン・スクェアーでは遣米使節による米軍の閲兵が行われた。

大舞踏会

25日にはメトロポリタンホテルでニューヨーク市主催による歓迎の大舞踏会が開催され、一万枚にものぼる入場券（10ドル）が用意された。舞踏会は夜の八時過ぎともなると大変な賑わいとなり、酒を酌みかわすグラスや酒瓶をあける音が絶えなかった。ダンスは乱舞となって、酔った男女が握手やキスをする様子に新見の従者玉虫左太夫は「奇なる風俗と云べし。」と書き残した。武士にとってやはりダンスパーティは苦手なようで、副使の村垣は「大ダンスは大饗宴なれど、・・・はなはだ迷惑な事どもなり。」と不満を漏らしている。一方勘定方組頭の森田清行は、収益が幾らになるか調べているところは、職業柄とはいえさすがである。また中には握手を求められて、自分がアメリカ女性に持てると勘違いする人たちもいたようだ。

メトロポリタンホテルで開催された幕府使節団を歓迎する大舞踏会。用意された入場券は一万枚にものぼり、大盛況であった。

アメリカ人が見た使節

当地の新聞によると、遣米使節らは公式の場に同じ服装で現れたことがないと書かれているので、常に服装を変えられるだけの準備をしての渡米であったことを窺わせる。新見豊前守、村垣淡路守、小栗豊後守の使節三人は各々九人の従者を日本から帯同しており、大統領をはじめとする高官らとの会見に粗相の無い様、特に服装など身の回りのことには大変気を使っていたようである。

アメリカ人たちは世界の果てともいうべき遠い国からやってきた日本の使節を好奇の目で眺め、はじめは他の小国同様に先進国アメリカを見て圧倒され、腰を抜かして震え上がるぐらいに思っていた節もあるが、使節の聡明かつ堂々とした威厳のある態度に接し、尊敬の念を抱くようになる。新聞には「我々は彼らを見習わなければならない。」といった報道までされるようになった。

視察と小栗の近代化構想

アメリカ滞在中、使節団は日米交流と見聞を広める為に可能な限りいろいろな場所を訪れた。前号までに紹介したワシントン海軍工廠やフィラデルフィア造幣局の他にも、印刷工場や製糖工場、天文台、博物館、図書館、測量局、税関、病院などを見学し、その業務内容を詳細に記録した。これらの視察は使節団に、日本の近代化に必要な事柄を充分教えてくれたはずである。小栗はアメリカからネジを何本も持ち帰っているが、鉄の文明国アメリカを象徴するするものが、このネジだったといえる。日本もこうした鉄製品を大量に生産出来る近代国家にしたいという小栗のビジョンと願いが、持ち帰った小さなネジから伝わってくるようである。日本を近代化するには何をすべきなのか、何から手を付けたらよいのか、といったことで小栗の頭はいっぱいであったに違いない。造船所をはじめとする近代工業施設、鉄道、中央銀行、商社や株式会社、商工会議所、郵便や電信制度、新聞発行、洋式陸軍制度、外国語学校、ガス灯の設置、鉄山開発、森林保護などなど。これらは帰国後の小栗が提唱したり、実際に手がけた日本近代化に向けた数々の計画である。

水洗トイレを使ったサムライたち

ワシントンのウィラードホテルやニューヨークのメトロポリタンホテル滞在した小栗は、このような格調ある迎賓用ホテルが日本にも是非必要であると痛感した。この構想はのちに小栗の建議から清水建設二代目の清水喜助によって完成した日本初の西洋式宿泊施設・築地ホテルに発展している。慶応四年完成の築地ホテルは、水洗トイレまで備えた西洋ホテルで、維新後の東都名所のひとつにもなった。当時のアメリカでも水洗トイレは珍しいものであったが、ウィラードホテルなどの高級ホテルには既に完備されていて、使節団のサムライたちも、ハイカラな水洗トイレには随分驚いたことであろう。

ペリー家訪問

使節団は黒船に乗って二度に渡り日本に来航したペリー提督の、すでに故人となっていたがその自宅を表敬訪問した。ペリー未亡人に会った使節は「ペルリの後家は隠順にして威もある老婆なり。」、また娘婿のヘルモント氏については「質実温柔な人柄。」と好意を持って描写している。使節らはペリー夫人から泡盛を振舞われて、懇ろに歓待された。夫人はせっかくこうして日本から来てくださったのだから、彼が生きていてくれればよかったのにと、涙ぐんだという。

ニューヨーク港出帆

1860年7月1日（万延元年五月十三日）、使節団一行は世界最新鋭米軍艦ナイアガラ号（4,800トン）に乗艦してアメリカに別れを告げ、ニューヨーク港を出帆した。大西洋を渡るこの航海では水不足に悩まされ、一日の飲み水もかなり制限される厳しい船旅となった。

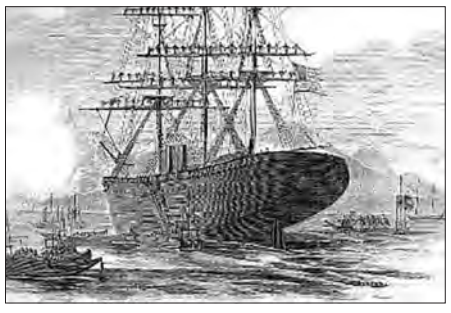
8月7日、アフリカ大陸アンゴラのロアンダ港に到着すると、ポルトガル人に使われる黒人奴隷たちが、首鎖でつながれて鞭を打たれる姿に大きな衝撃を受ける。アメリカ国内でも黒人奴隷はたくさんいて、使節らのメイドとして働く女性も奴隷であった。その彼女が到来の品など何一つ持っていないと涙を流すのを不憫に思い、扇子などを与えた者もいたが、このアフリカの地ではもっと生々しい光景が展開されていたのであった。幕府首脳はアヘン戦争の結果、租借地となった香港ではたくさんの中国人が奴隷（苦力）となって英国人にこき使われているという情報から、列強の脅威に対する警戒心を抱いていたが、ここアフリカではもっと露骨に世界の現状を知ることとなった。長州藩や公卿、一部幕閣らが唱える具体策を持たない観念的な攘夷という思想が、世界の列強を相手にした場合の国防を考えれば、いかに無知で時代遅れ、かつまた無謀で危険な政策かということを、使節らは植民地になった国々を見ることによって、より深く知り得たといえる。

帰国

ナイアガラ号は喜望峰を廻り、ジャワ島バタビア、英国の支配下にある香港を経由して、万延元年九月二十八日（1860年11月10日）、品川沖に到着した。ナイアガラ号乗組員たちはマストのヤード（横桁）に整列して帆船最高の儀礼「登檣礼（とうしょうれい）」で使節団を見送ってくれた。使節団77名は日本人として初めて世界一周を果たしての帰国だった。翌二十九日には正使・新見ら遣米使節は将軍家茂（いえもち）に拝謁して、帰朝報告をおこなった。

九ヶ月ぶりの日本では、三月三日の雪の朝、大老・井伊掃部頭直弼（いいかもんのかみなおすけ）が登城途中に水戸浪士らの凶刃に斃され、その反動から再び尊皇攘夷の逆風が吹き荒れていた。しかし小栗はアメリカという先進国をつぶさに見聞した経験を大きな収穫として、近代化に向けた挑戦を続け、幕末の日本をリードしていくのであった。

（続く）



品川沖に停泊した世界最新鋭米軍艦ナイアガラ号。檣（帆柱）のヤード（横桁）に水兵が並ぶ帆船の儀礼「登檣礼」で遣米使節団は見送られた。